

益田市市長
山本 浩章

8月11日は「山の日」です。祝日法では、「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」ための日とされています。法律で決まったのが平成26年、実際に休日としてスタートしたのは平成28年という新しい祝日です。

日本は山の多い国で、総面積に占める森林面積の割合は67%に上ります。中でも中央に中国山地が走る中国地方5県の森林比率は軒並み全国平均を上回りますが、そのうち高根県はもつとも高い78%、さらに益田市はそれをも上回る86%と、実に9割近くが山となっています。この広い山林から産出される豊富な木材資源を有効に活用することは、今後の課題であると同時に可能性でもあります。その意味で、今年度から交付される森林環境譲与税を林業再生、ひいては山間部振興に適切に活用していく必要があると考えています。

一方で、山は悲劇の舞台ともなります。登山やスキーの際の負傷は珍しくなく、最悪の場合、滑落や雪崩のために命を落とすことさえあります。例えば、1980年の日航ジャンボ機墜落事故も御巢鷹山で起きました。乗員乗客合わせて520名もの犠牲をともなった惨劇は、単独の航空機による事故としては今もって世界史上最大です。この事故の発生日であり、毎年追悼登山が行われる8月12日が「山の日」の次に来ることは悲しい巡り合わせといえます。

「山の日」の制定にあたっては、何月何日にすべきか、最終決定までに紆余曲折があったようです。おさまりとということでは、漢数字の八は裾の広い山のようにすし、算用数字の11が樹木の立ち並ぶ様に見えなくもないことからすれば妥当なところかと思えます。

最後に、この祝日と私の苗字を掛けた都々逸をご披露します。(なお、都々逸とは、7・7・7・5の音節を連ねて作る歌で、ほんの一例を挙げると、「粹な都々逸、愉快な響き、七が三つに五が一つ」などです。以上蛇足)

- ・「山」が名前の頭に付いて
- ・よけい親しみ「山の日」に。
- ・日付よく見りゃ漢字の八に
- ・十と一とで「本」になり。



中世益田講座「益田氏 VS 吉見氏」(全7回)

第5回 雪舟の傑作と源氏物語の最善本

【問い合わせ先】 市文化財課 ☎ 31-0623

室町時代から戦国時代にかけて激しく争った益田氏と吉見氏。彼らは一方で、文化にも高い関心を示し、その水準は全国屈指のものがあります。

益田氏については、室町時代の益田兼堯が雪舟を招き、自らの肖像画(益田兼堯像)を描かせ、万福寺と医光寺に庭園を築かせたと伝わっています。益田は、日本最高の芸術家である雪舟の遺産が最も伝わるまちであり、さらに死没地としても最有力視されています。また、万福寺本堂や染羽天石勝神社本殿といった建築物、万福寺の二河白道図をはじめとする仏画や仏像なども中世の優れた遺産です。

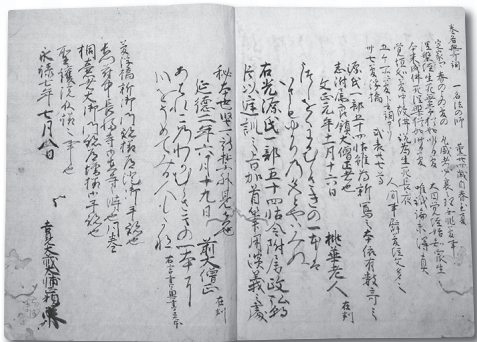
吉見氏も負けてはいません。鷲原八幡宮の美しい社殿や、弥栄神社の鷲舞は中世の優雅な文化を現在に伝え、全国的にも著名です。

さらに、戦国時代の当主吉見正頼は、自ら優れた文化遺産を制作し、それが現在に伝わっています。磨き上げたという刀・吉見左文字が徳川美術館に、制作した琵琶が萩博物館に伝わっています。そうした吉見正頼の文化遺産の最たるものが源氏物語の最善本とされる大島本源氏物語です。

もともとは、山口の大名大内氏が、京都の公卿であり歌人でもあ

る飛鳥井氏に頼んで筆写してもらったものであり、正頼が大内氏から妻を迎えた際の引き出物とする説と、大内氏の山口没落の際に正頼が確保したという説があります。正頼は欠けていた桐壺と夢浮橋の二巻を聖護院門跡という撰家出身の僧侶二人に書写してもらったと記しており、さらにはいくつかの源氏物語を比較して注釈を入れていた可能性が指摘されています。

かたや雪舟の傑作を多く残した益田氏、かたや源氏物語の最善本を伝えた吉見氏、彼らは文化でも実力伯仲しており、当時の石見西部は全国屈指の文化水準にありました。



大島本源氏物語(古代学協会蔵。京都府京都文化博物館寄託)の夢浮橋の巻の奥書。永禄七(1564)年に欠けていた二巻を聖護院門跡に書写してもらったと吉見正頼が記しています。